21世紀の新しい日本を創る提言誌
昭和53年2月10日第三種郵便物認可 平成18年4月1日発行(毎月1回1日発行)通巻340号

Voice

ボイス

4

定価620円

特集 日米同盟を疑え！

坂元一哉 森永卓郎 町村信孝 勝田吉太郎 松村 劭

旧皇族の活用なしに万世一系は守れない | 竹田恒泰

「人徳」なき若手企業家たちへ | 北尾吉孝

対談 魔物に化ける資本主義 | 稲盛和夫 堺屋太一

保守政治は再生するか

溶けだした日本を救う若手議員を連続インタビュー

聞き手 中静敬一郎（ジャーナリスト）

野田佳彦（のだよしひこ）
（衆議院議員・民主党）

小泉首相の靖国参拝は保守の堕落だ

稲田朋美（いなだともみ）
（衆議院議員・自民党）

自民党は本当に保守政党か

松原　仁（まつばらじん）
（衆議院議員・民主党）

共産中国は十年もたない

古屋圭司（ふるやけいじ）
（衆議院議員・無所属）

人権擁護法を阻んだ功労者たち

山谷えり子（やまたにえりこ）
（参議院議員・自民党）

改定された男女共同参画基本計画

います。裁判の名に値しない茶番であり、適当な呼称があれば、東京裁判という呼び方を変える必要があると思います。

共産中国は十年もたない

松原仁（まつばら じん）（衆議院議員・民主党）

――中国の「反日」教育の問題点を訴えてきたのが、拉致議連事務局長代理の松原さんです。日本人の「嫌中」感情が強まっている現状をどう見ますか。

松原　中国の日本叩きがあまりにひどいことに原因があると思う。「ここまで謝っているのに、まだ叩くのか」ということでしょう。日本や中国、韓国などは文化圏は同じ。もちろん、原日本文化とは違う要素があり、精神的風土は別ですが、漢字や衣冠束帯など、かたちの風土は中国に依拠している。そうした中国の文化との一体感があるなかでの嫌中感情の高まりは、日本人が最低限の防衛本能を見せたからだと思う。

――中国の反日教育の実態もわかってきましたね。

松原　私が昨年、指摘した中国の反日教育は、江沢民時代から十五年以上にわたって続いてきたものです。私が知人から入手した『中国歴史・教師用指導書』（一九九五年版）には「生徒をして、日本帝国主義に対する深い恨みを心に植え付けるようにしなければならない」との記述があった。教科書と抗日記念館と映像などを組み合わせて、反日教育を展開しているのは、外部に敵をつくることによって、不満が中国共産党に集まるのを回避する狙いがあるからです。

――中国の国内矛盾も拡大しています。

松原　昨年十二月、松下政経塾のOB仲間と訪中し、唐家璇前外相に会いました。そのとき、阿南惟茂駐中国大使がまったく別人のように自信なさげでしたね。以前、訪中したとき、大使は自信に満ち溢れていた。

なぜ、自信をなくしたように見えたのか。それは、彼が褒め讃えていた中国がいま、おかしくなっているためです。

北京市の交通副部長の自宅に泥棒が入って、日本円にして六億円が盗まれたという話があります。北京の平均サラリーマンの年収が五〇万円ぐらいですから、特権を使っていかに金儲けをしているか。汚職と貧富の格差の拡大、さらには個人の財産権なども保証されていない。河北省ではその地区の党幹部と結託した暴力団が、立ち退きを拒否する農民六人を撲殺したと報道されていました。公安当局の発表によると、五〇人以上の暴動が年間七万四〇〇〇件も発生している。発表ですから、それ以上でしょう。警察への信頼感はほとんどありません。

何よりも驚いたのは、大使が「十年後、二十年後、皆さんのお相手をするのは中国共産党ではないかもしれません」と説明したことです。中国社会の矛盾

は、限界を超えていると見ているためでしょう。

――中国はそのために批判をそらそうとしているわけですね。

松原　仮想敵を求めているのです。当局が弱気になってしまったら、一気に暴徒化することもあるかもしれません。その意味で、北京五輪ができるかどうかは大きい。できないとなると、一気に求心力が失われるかもしれません。

――日中関係をどう考えますか。

松原　中国がゆとりある状況なら、妥協できると思いますが、もうぎりぎりですね。彼らもどうしていいのか分からないのでしょう。中国は、靖国参拝などについて日本は譲歩すべきだと思っています。しかし私は、譲歩すべきだとは思いません。そもそも靖国問題は、国際法上あってはならないような東京裁判の問題と、国家の名誉に直結する課題だからです。だからこの問題は日中だけでなく、アジア全体のなかで考えるべきだと思っています。

私は昨年、日越友好議員連盟の仲間とベトナムを訪問しました。私はその席でベトナムの人々に「中国をどう思うか」と問うとともに、「靖国神社に対する日本の首相の参拝をどう思うか」と尋ねてみた。中国については、多くが「怖い」といっていました。ベトナムは中国と一五回戦い、二回負けたが、その敗北の結果、一千年間も支配されたからです。

靖国の問題については、小泉首相の参拝がアジア人の怒りに火をつけたという中国の主張に対しては「事実と異なる。われわれはそう思っていない」と指摘していました。「首相が参拝していいと思う」という意見もあったし、「われわれは死んだ人を鞭打たない」ともいっていた。日本はこういう国を大事にするべきです。中国が日本叩きをしている以上、親日国家と連携をとらなければなりません。

ベトナムに加え、インド、フィリピンなど、日本に親近感をもっている国は皆、同盟国です。そもそも隣の国との付き合いは、世界中どこであっても難しい。ご近所づきあいと同じようなもの(笑)。町内でも、町内会長と副会長とは仲が悪いことがしばしばあります。

さらに今年の一月十一日から十三日まで、私は衆議院外務委員会の派遣で、沖縄県のキャンプ・シュワブと日中中間線に関わるガス田群、さらに尖閣諸島の視察を行ないました。日中ガス田問題の中心である、中国名でいう「天外天」と「春暁」、さらに尖閣列島を、自衛隊機で上空から視察しました。天外天においては、海底より抽出した天然ガスをプラットフォーム上で炎にしている現実を目の当たりにして、資源問題について危機感を新たにしました。この正式な議員行動をマスコミがほとんど扱わなかったのは、国益上たいへんに残念です。

自衛隊幹部との質疑のなかで分かったことは、在沖縄米軍は沖縄のなかに複数の射爆場を確保して、実弾を使った訓練を行なっているという。なかでも、尖閣諸島の五島の一つである無人島「久場島」を射爆場として年に何日も実射訓練

を行なっているとの説明がありました。

一方、日本の自衛隊は射撃場に恵まれず、実射訓練の機会が少ない。もし尖閣列島内の久場島射爆場を共同利用させてもらえれば、自衛隊の能力を高めるとともに、内外に日本が尖閣諸島を領有している実態を示すことになります。もちろん、同盟国である米軍が尖閣列島の一つの島を使用していること自体も、尖閣列島が日本の領土であることを示すものですが、日本自らが米軍とともに訓練を行なう意義は、その実効支配のうえできわめて大きい。

その後の石垣市長や石垣市議会議長との話し合いでも、市議会の総意のもとに魚釣島上陸の予算を石垣市議会で一六〇万円計上したことを聞き、離島地域の防人意識に大いに感激しました。

にもかかわらず、日本の領土を守ろうとする地方議会の行動は、文書によらない内閣の指導で抑制されたといいます。事実ならば、日本政府に真の国益を考える姿勢が大きく欠落していると指摘せざるをえません。

――保守主義をどう考えますか。

松原　保守主義の要諦は二つ。一つは教育です。いまはマッカーサーの愚民政策が功を奏している。権利には、責任が伴うことを教えていません。今年もそうでしたが、成人式に暴れる成人がいること自体が、その証しです。

昔は、数えの十三歳から十六歳で元服を挙げた。それは切腹の仕方を教える儀式でした。権利に責任が伴うことを教えていたのです。また、社会の教育力も落ちています。最近、隣のおじさんに叱られた子供はいますか。そもそも叱る人があまりいなくなっている。共同体意識が薄まっているのです。子供たちの社会奉仕についても考えなくてはなりません。まず、郷土に触れ合うことが重要です。

もう一つは外交です。私の持論は、人格ある組織こそ活力ある組織であり、無人格の組織は無責任の組織となってしまうというものです。国家は人格ある個人の集合であり、その意味で国家が人格的存在として国民にどう映るか。いまは国旗を燃やしても国民が怒らない、自信がない国家です。こうした自信をもたない人格が、国民の意識にどういう影響を及ぼすか。最近の青少年は自信をもてないという。そうした自己嫌悪感も、外交によるところが大きいといえます。

毅然たる外交が、毅然たる個人をつくるのです。上海総領事館員の自殺も、なぜ隠していたのでしょうか。人格的存在でもある日本が、誇り高く、自信をもつ人格であることが大事です。

――守るべきものは何と考えますか。

松原　きわめて日本的な、日本古来の文化だと考えています。その象徴の一つは、伊勢神宮の二十年に一回ある式年遷宮です。伝統を維持しつつ、内宮・外宮をはじめすべての建物を建て替える。これこそ、かたちにとらわれない日本文化のダイナミズムそのものです。

こうした日本固有の発想は尊重されるべきです。奈良時代には和魂漢才で律令制をつくり、明治においては和魂洋才で

近代化し、成功した。日本文化のもつ許容性も、守るべきものです。そしてこの柔軟性と許容性に、二十一世紀へレニズム文化ともいえる、今後の世界に最低限求められる共通文化の原理が見出されると考えられます。